

HELLO PSJ

オレゴンから愛

Oregon National Primate Research Center, Oregon Health & Science University
(京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニット) 中村 和弘

皆さん、アメリカ・オレゴン州と聞いて何を思い浮かべますか？

この質問をすると、多くの方は「オレゴンから愛」という昔のテレビドラマを挙げられます。このドラマで登場するように、オレゴンでは6月頃になると地元産の甘くておいしいイチゴが出回ります。また、このドラマでも描かれていたような大自然が、車でちょっと走れば楽しむことができるのもオレゴンの大きな魅力です。私は、このオレゴン州のポートランド近郊にあるオレゴン健康科学大学(OHSU)へ約4年半(2004年11月-2009年3月)留学しました。

OHSUは、アメリカ西海岸で有数の医学校の一つであり、神経科学分野の方には、有名な電気生理学者の多く集まる Vollum 研究所がある大学と言った方がピンとくるかもしれません。私の留学した Shaun Morrison 研究室は、ポートランド中心部の Main Campusから車で30分ほど離れた郊外に位置する West Campus 内のオレゴン国立霊長類研究センター(ONPRC)に所属しています。ONPRCはアメリカ全土に8つある国立霊長類研究センターの一つで、最近では、猿のES細胞の作製に成功したという報告が日本でも大きく報道されました。Shaun Morrison 研究室は霊長類ではなく、主にラットを使った *in vivo* 電気生理学の手法を用いて、自律神経システムの中樞メカニズムを研究しています。

Shaun との出会い

研究室を主宰する Dr. Shaun Morrison と私が

初めて出会ったのは、2001年にサンディエゴで行われた Neuroscience meeting でした。その当時、京都大学薬学研究科の大学院生だった私は、延髄縫線核の一部が感染性発熱惹起の交感神経シグナルを中継する重要な脳部位であることを見つけ、ポスター発表する予定でした。そして、その隣のポスターで発表することになっていたのが Shaun でした。私は、彼がどうやら私と同じようなことを見つけているらしいと聞いており、またその頃、英会話がそれほどできるわけではなかったため、「攻撃されたらどうしよう」と怯えながら、相当緊張して学会に臨んだのを覚えています。

発表当日、私がポスターを貼っていると、ちょうど Shaun もやって来て、黙々と私の隣のボードにポスターを貼り始めました。見た目神経質そうな風貌で、自律神経生理学の有名人であるその彼を横目に、私の心臓は破裂しそうでした。そして、ポスターを貼り終えた彼はついに私の方にやって来て言葉を発したのでした。

「僕たちはどうやら、同じものを見つけたようだね。」

その時の彼の笑顔は、私のそれまでの緊張を解きほぐすのに十分なものでした。ポスターの前で、私は自分のデータをつたない英語で一息懸命説明し、彼は嬉しそうにそれを聞いてくれました。時折、的を射た質問を挟みながらも、研究者の卵を包み込むように彼が送る温かい眼差しは、研究者の先達としての懐の大きさを感じさせるものでした。

発表終了後、その日は学会最終日だったのでホ



Picture 1 今夏、みんなで訪れた出雲大社にて。左より筆者、Shaun、Shaun labのポストドクChris Madden、Chrisの奥さん、筆者のラボの中村佳子博士研究員。

テルに戻り、空港へ行くシャトルバスの待ち合い場所に行くと、なんと、スーツケースの上にちょこんと腰をかけたShaunがこちらを向いて笑っているではありませんか！偶然同じホテルに泊まっていたようで、空港までの車内で、いろいろとお互いの研究室の話などをし、そのときに何か縁のようなものを感じたのでした。

そして留学

博士号取得後、私は2年半ほど京都大学医学部でポストドク（学振特別研究員）をし、Shaunの研究室に留学しました。留学先の候補として、私がそれまでに学んだ神経解剖学的技術を生かしながら新たに生理学を学べる研究室が複数あり、迷いましたが、最終的に私は、研究室の主宰者に会って話をした印象で（もちろん上のような経緯もあって）留学先を決定しました。これは今思うことですが、留学先の決定にあたっては、受入研究者の人柄を重視することは大切なことだと思います。特にアメリカの場合、NIHのR01レベルのグラントが取れているラボに留学する限り研究環境や研究室財政で問題が生じることは稀で、それよりもラボの統括者の人柄が留学の成否を握る大きなファクターになるように思います（留学する側の人柄も大切なことは言うまでもありません）。

Shaunの研究室では主に、麻酔ラットを用い



Picture 2 筆者が実験中に窓からいつも見ていた景色。研究所が森の中にあり、たまに野生の鹿が顔を出すことも。カラーでお見せできないのが残念！

て、主要な体温調節器官である褐色脂肪組織や皮膚などから交感神経活動を電気生理学的に記録し、脳内の特定の部位に薬物を微量注入して交感神経活動への影響を調べることで、体温調節、感染性発熱やエネルギー消費制御に関わる中枢神経回路を明らかにしようとしています。こうした生理実験は朝から手術を始めて昼過ぎに記録を取り始め、夜中過ぎまでかかることも珍しくありません。また、大変な集中力と器用さを要求されます。実験以外にもいろいろと忙しいながらも、Shaunは60歳を過ぎた今でも、私達と並んで、この実験を自らの手で行っています。それ故に、彼とは常に実験者の視点で非常に有用なディスカッションを行うことができ、この「一生涯実験者」の姿勢が若手研究者に与える良い影響を学ぶことができました。

もう一つ私が将来見習いたいと思うShaunの姿勢は、「(ある程度訓練を積んだ)若手研究者のアイデアと意思を尊重する」ことです。もちろん、必要なディスカッションはしますが、自分のプロジェクトをどのように展開するかは完全に私達に任せられています。お陰で私は、強いモチベーションを保ちながら、自分ができる精一杯の仕事ができたと感じています(その一部は、本誌SCIENCE TOPICS-59 “体温の調節に必要な温度感覚経路”

(第70巻, 119ページ, 2008年)に掲載)。また、サイエンスにおいて上下関係は作るべきではないという考えも強く、ある学会でお会いした日本人研究者に Shaun を「boss」ですと紹介したら、彼は「bossではなく colleague だ」と言ったのが非常に印象的で、実際に研究室の日常でも私達とはそのように接してくれました。

帰 国

このように、オレゴンでの留学生活は非常に居心地が良く、このまま居続けることも考えましたが、敢えて研究室を出ることにしました。その理由はまず、一カ所に何年も居続けると考え方がマンネリ化し、研究の新たな展開が難しくなると感じたことと、ある程度ポストドクをやったら独立し、自らの研究分野の研究室を一つでも増やすことがこの分野にとってプラスになるだろうと考えたからです。この私の判断が正しいかどうかはまだ分かりませんが、幸いにも京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニットの若手リーダーに採用され、本年4月より小さな独立研究室を持たせて頂くこととなりました。Shaun には、渡米時の生活のセットアップを手伝ってもらったり、私の妻が研究を続けられるように配慮してもらったり、大変お世話になったので、研究室を出るのは心苦しくもあり、寂しい気持ちで一杯でした。しかし、彼には快く送り出してもらえ、またそれ以上に、これまでのように、オレゴンからメンターとしての

「愛情」とも呼べるようなものを注いでもらっているように感じています。今後、その気持ちに報いるような仕事ができるように精進して参りたいと思います。

最後に

「留学することのメリットは何ですか?」という質問をよく受けるのですが、私の場合、異文化・非母国語の環境でも何らかの仕事を成し遂げることができ、これから研究者として生きていく上でかけがえのない自信を得たことだと思います。また、それに加えて、(いろいろな意味での)広い世界を見たことでしょうか。いくら研究設備が充実し、流通やインターネットが発達して、人やモノ、情報の国際的な行きかいが速くできるようになったとしても、外に出て交流しないと得られないものはまだまだたくさんあります。サイエンスは研究室や国内で閉じているものではなく、世界に向かって開けているべきものですから、特に島国にいる以上、井の中の蛙になってしまわないように努めることがとても大切ではないかと思う今日この頃です。

この原稿が掲載される頃には、私の研究室のホームページが完成していると思います。もし御興味をお持ちの方がおられましたら、<http://www.cp.kyoto-u.ac.jp> から中村グループへのリンクを御覧下さい。